大蛇と瓢箪

むかしむかし、山に囲まれた小さな村に次郎兵衛という、百姓が住んでいました。次郎兵衛には年頃の娘が三人おったんだと。ある年のこと、この地方一帯にひどい干ばつがおこったんだと。毎日毎日、日照りのために田んぼが渇き、稲が枯れ始めたんだど。次郎兵衛は困ってしまい、思案の末、主が住んでいると言い伝えのある沼さ行って、頼んでみる決心をしたんだど。次郎兵衛は沼に向かって「どうかどうか、雨っこ降らせてけれ。田の稲も枯れてしまって、なんもかんもならねぐなったんだし。もし、雨っこ降らせてければ、オレ家の、おら家の娘っこ一人を主どさあげるから、どうか頼む」と、願ったんだと。次の日次郎兵衛が田回りに行ってみたら、次郎兵衛の田んぼには、水がいっぱい入ってたど。次郎兵衛は、「昨日の願いがかなえたんだなぁ」と踊りあがって喜んだど。約束を思い出してハッと

してしまったんだと。めんけ娘たちさ、なんとして言うもんだって。んだども、約束破るごったば、なんたおっかねぇごと起こるかわからないなぁ、と考えれば考えるほど、恐ろしさが募って、とうとう寝込んでしまったんだと。「おど、おど。起きてまんまけぇー」「心配事があって起きられねぇ」というばかり。娘達はいろいろ聞いてみたら、実はこういうことだと打ち明けたんだと。それを聞いた一番目の娘は「オラだば沼の主にいがねしい。」と、断ったど。二番目の娘も断ったど。三番目の末娘は「おど、おど、心配するな。オラが行くからなぇ」と、言ってくれたんだと。次郎兵衛はほっとして、「あー、いがった、いがった。おめが行ってくれるごったば、なんでも好きな嫁入り道具を持たせるからな」と言って、喜んだと。末娘は「なんもいらないから、針千本と瓢箪を千、用意してけれ」っていうので、次郎兵衛は針と瓢箪を用意してやったど。いよいよ嫁入りの日が来たんだど。ままんで絵にかいたような、若い婿さんが、綺麗な着物姿をして嫁さんを迎えに現れたんだど。末娘は花嫁姿で、婿さんのあとからだまってついで行ったんだど。村を抜け、山の奥へ奥へと曲がったあぜ道を、いくつもいくつも通り過ぎて、やっと青々と水がいっぱい入った古い沼についたんだど。「さぁ、ここが私の家じゃぁ」と言って、末娘に教えたんだど。末娘は少しも恐がらずに「まづ、あんさん、先にお家さ入ってたんせぇ。そしてこの瓢箪を全部沼の底に沈めて、針を浮かせてけだら、オラも入っていぐがら」っと言ったど。沼の主は瓢箪を沈め、針を浮かべにかかったんだど。いくら一生懸命に頑張っても、針は浮かないし、瓢箪は沈まないので、困ってしまって、バジャンバジャンと水しぶきをあげて、だんだん気が荒くなり、沼中をかけずりまわったと。体のあっちこっちに針が刺さって、荒れ狂い、とうとう沼の主の正体を現し始めたんだと。キラキラ光るうろこをつけ、爛々と目を輝かせ、真っ赤な口を開けて、苦しむ大蛇の姿は、見るも恐ろしい様であったんだど。大蛇はくまなく針が刺さって弱って、沼の底に身を沈めてしまったんだど。沼は波一つたたず、静かに青く美しがったんだって。そうして末娘は無事に家に帰ることがしたんだど。本当にめでたし、めでたし。とっぴんぱらりのぷー。

仁平佐喜子(鶴形　65歳)

〈解説〉

『通観』に「蛇婿入り」として類型化されている昔話である。「蛇婿入り」もいろいろな形で県内に広く分布する。ここに挙げたのは「退治型」といわれ、水乞いの話に三人の娘がからみ、三番目の娘が一計を案じて沼の主である蛇を退治する話。娘の孝行を讃える話になっている。「蛇の婿入り」には、娘が蛇を退治したあと、嫁に行くと言って出た家に帰るのをためらい、途中で立ち寄った家で姥皮を着て婆に変身して働いていたところを、そこの息子に見破られ、惚れられて結婚するという話をつけた「姥皮型」がある。話者の仁平さんが『伝承文芸』で語っている「蛇婿入り」はその「姥皮型」になっている。いずれにしろ水不足に悩む農村に生まれた「水乞い伝説」である。